



Title	ポーランドと日本のコロニアル・アンビバレンスー ジョゼフ・コンラッドが導く比較研究ー
Author(s)	Shimomura, Anna
Citation	大阪大学, 2026, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/105367
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (Shimomura Anna)

論文題名

ポーランドと日本のコロニアル・アンビバレンス
ージョゼフ・コンラッドが導く比較研究ー

論文内容の要旨

本論文は、「東洋の周縁」に位置する国家が、植民地主義言説を通して自己理解と国民的物語をどのように形成してきたのか、ポーランドと日本の事例を比較することで考察する。両国は、世界史において曖昧な位置を占める一植民者であると同時に被植民者でもあり、完全に「西洋」でもなく、完全に「東洋」でもない。いわば〈東一東の連続体〉の境界に位置する両国は、アンビバレンス、模倣、そして西洋へのルサンチマンに形づくられた諸戦略を通して、近代的な国民アイデンティティを構築してきた。本研究では、これら半周辺的な諸国が、文学を用いて「誰が〈我々〉なのか」という根本的な問いにどのように答えようとしたのか、そして植民地的想像力が、内的亀裂や歴史的責任を覆い隠しつつ、国民的帰属を安定させる手段としてどのように機能したのかを問う。本研究は、ジョゼフ・コンラッド、ヘンリク・シェンキェヴィチ、大佛次郎という三名の作家を対象とした比較精読を中心に展開する。三者はいずれも国民アイデンティティの危機、政治的敗北や植民地的欲望といった問題を抱えた時代に生き、植民地を舞台にした物語、人種化された他者との遭遇、フロンティア冒険譚などの文学的トポスを用いながら、自身の「位置」を定義しようとしたという点で共通している。本論文の目的は、これらの語りが単なる娯楽的要素ではなく、国民的共同体を想像し、正当化し、安定化させるための装置としていかに機能していたかを明らかにすることである。

本論文は、ジョゼフ・コンラッドの人物像と著作を軸としてシェンキェヴィチと大佛の作品を検討することを目的とする。コンラッドは帝国主義の最初期の重要な批判者の一人として評価されてきたが、多くのポストコロニアル研究者が指摘するように、彼の植民地主義への態度はきわめて両義的であった。コンラッドは旧ポーランド＝リトアニア共和国のいわゆる「Kresy (クレシィ)」(おおまかに現在の西ウクライナ、ベラルーシ、リトアニアを指す地域)に生まれ、そこでは社会・民族的ヒエラルキーが植民地的関係に類似していた。とりわけ、この地域ではポーランド系貴族が支配階層を形成し、ウクライナ系農民を中心とする農奴制的従属構造が長く維持されていたため、「被支配者」と「支配者」という関係が明確に固定化されていた。しかし同時に、彼の生涯において、共和国(および「クレシィ」)はすでに周辺三帝国(ロシア、プロイセン、オーストリア)によって分割・消滅させられていた。したがって、「クレシィ」における支配者としての経験と、列強による被支配者としての経験というポーランドの二重の植民地体験は、コンラッドの植民地主義に対するアンビバレントな態度を形成する要因となった可能性がある。

コンラッドの(反)植民地主義的著作は、日本帝国の植民地主義言説にも影響を与えた。一方で日本は、西洋帝国主義を批判するコンラッドの議論を「大東亜共栄圏」理念の正当化に利用し、他方で西洋の植民地的海洋文学を代表する作家としてコンラッドを評価し、西欧の帝国主義的フロンティア精神の範例として参照した。とりわけ、コンラッドのマレー作品は、日本が東南アジアを認識する際の「西洋眼鏡」として働いたと指摘されている。

シェンキェヴィチと大佛次郎の作品には、両者が生きた時代の政治的空気や言説が反映されており、「東」と「西」の境界に立つポーランドと日本それぞれのアンビバレントな位置が如実に表れている。本論文では、コンラッドに関する広範なポストコロニアル研究を参照軸としつつ、両作家の作品を分析することで、両国がいかにしてこれら二つの「世界」のあいだを絶えず交渉してきたのかを明らかにすることを目指す。

本論文の理論的枠組みの中心としては、とりわけホミ・バーバの「コロニアル・アンビバレンス」および「模倣」の理論、酒井直樹の「対一形象化の図式」の概念、さらにマリア・ヤニオンの「不気味なスラヴ世界」の議論を援

用する。これら三つの視点は、国民アイデンティティが本質的に他者関係によって形作られ、抑圧された起源や文化的欠損が亡霊的に回帰し、さらに西洋との距離化と接近の揺らぎの中で再構成されるという構造を解明するための理論的基盤を提供する。本論文は、これらの理論を組み合わせることで、ポーランドと日本という「オリエントの周辺」に属する国が、近代・植民地主義・国民という想像共同体の形成において共有する構造的アンビバレンスを可視化することを試みる。

もっとも、両国の植民地主義的経験や文化的自己表象には本稿で触れきれない多様な論点が存在する。本論文では、その広大な問題系の中から、とくに本研究の目的にとって中核的と考えられる主題に焦点を絞り、以下の章で順に検討していく。

第2章では、コンラッドの短編「Karain: a Memory」とシエンキェヴィチの短編「Sachem」に見られる「連帯なき共感」という構造に注目する。両者は、スラヴ的「土着性」あるいは被支配者としての自国の歴史を、マレー人首長やネイティブ・アメリカンの演者といった植民地的他者に投影するが、その共感は支配構造を揺るがす方向には決して向かわない。このアンビバレンスは、周縁的国家が「西洋」に含まれたいという欲望と、被支配の記憶を拭い去れない自己像の矛盾を象徴している。

第3章では、コンラッド『ロード・ジム』における「one of us (私たちの一人)」というフレーズを手がかりに、共同体を維持するための語りの力学を分析する。マーロウによる曖昧な包摂の言説は帝国秩序の脆さを覆い隠す戦略であり、大佛次郎においては、これが「武士道」という国家イデオロギーとして民族的共同体の境界を定義する働きを持つ。本章では、大佛の児童海洋小説『海の男』および赤穂事件の再話である歴史小説『赤穂浪士』を分析し、彼自身が「武士道」に対して疑念を抱きつつも、最終的にそれを保持・再生産してしまうメカニズムを明らかにする。

第4章は、混血／ハイブリディティという主題を軸に、周縁的国家が「純粋性」と「混合性」という二つの欲望をどのように調停しようとしたかを考察する。コンラッドのニーナ・オルメイヤーや大佛次郎のオインといった「混血」の登場人物は、「誰を〈我々〉に含めるのか」という問いの実験場となり、包摂と排除の論理が同時に作動する様相を浮かび上がらせる。

第5章では、二つの歴史小説、ヘンリク・シエンキェヴィチの『Pan Wołodyjowski』および大佛次郎の『乞食大将』を分析対象とし、敗北や受難の歴史を「道徳的優越」の物語へと転換するナラティヴ・メシアニズムや英雄的死の美学—を検討する。ここではとりわけ、「小国」という自己定位が、被害者性を象徴資本として動員しうるディスコースとしてどのように機能したのかを明らかにする。こうした「小国」意識は、歴史的苦難を倫理的威信へと変換する一方、自国の加害性を不可視化し、国民的アイデンティティを補強する役割を果たした。

第6章では、ポーランドの「クレスィ」と日本の「満洲」という二つの帝國的フロンティアを比較し、多文化共生という理想化されたイメージの背後に潜む支配の構造を明らかにする。シエンキェヴィチ『Ogniem i mieczem』においては、ウクライナ人が超自然的・妖異的なイメージによって異質化され、〈文明／野蛮〉という序列を強化する形でオリエンタル化されていることを検討する。一方、大佛次郎『幽霊大陸へ行く』では、帝国イデオロギーであった「五族共和」の理念が、物語の中で非日本人住民の姿を消去することで空洞化し、多民族共生の看板とは逆に、植民地的ヒエラルキーを不可視化する働きを担っている点を論じる。こうした比較を通じて、文学に描かれる「調和」や「共存」の幻想とは裏腹に、実際には非対称な権力関係と民族間の序列が覆い隠されており、その隠蔽こそが周縁的国家に特有の植民地的欲望を照らし出すことを示す。以上の分析を総合すると、ポーランドと日本に共有される両義性は、例外的な歴史状況ではなく、植民地主義的近代が生み出した構造的条件であることが明らかになる。両国は、劣等感や周縁性を克服するため、植民地的想像力を用いて自らの位置を作り替えようとした。本論文が示すのは、矛盾を解消しようとするのではなく、それを抱えたまま語ることこそが国民アイデンティティ形成の核心であるという点である。

この意味で、本論文の理論的指針として繰り返し参照するコンラッドの「homo duplex」は、単なる二重性の記述ではなく、近代主体に固有の分裂を引き受けるための態度として理解される。すなわち、自己の内部に潜む被害者性と加害者性、被植民者と植民者という一見相反する側面を認め、その複雑さを受容することこそが、周縁的

近代を生きる国家にとって避けがたい現実であると同時に、脱植民地化へ向けた第一歩でもある。言い換えれば、矛盾や葛藤を単純化せず、あえてそのまま抱え続ける姿勢が、歴史の多層性を見失わないための倫理的な実践となるのである。

本論文は、両義性を正面から扱う比較の枠組みを通じて、国民物語や植民地的想像力をめぐるポーランド・日本間の新たな対話を切り開き、中東欧研究と日本研究の架橋を試みるものである。さらに、この比較的アプローチを通じて、本研究は「西洋中心」の想定を揺さぶり、知の配置を周縁から問い直す試みでもある。すなわち、中東欧と東アジアという二つの周縁を並置することにより、知の生産そのものの脱中心化と脱植民地化に寄与することを意図している。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (シモムラ・アンナ)			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	大阪大学 教授	橋本順光
	副 査	立命館大学 名誉教授	西成彦
	副 査	大阪大学 教授	三谷研爾
	副 査	大阪大学 教授	石割隆喜
	副 査	大阪大学 准教授	鈴木暁世
論文審査の結果の要旨			
以下、本文別紙			

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：ポーランドと日本のコロニアル・アンビバレンス –ジョゼフ・コンラッドが導く比較研究–

学位申請者 シモムラ・アンナ

論文審査担当者

主査	大阪大学教授	橋本順光
副査	立命館大学名誉教授	西成彦
副査	大阪大学教授	三谷研爾
副査	大阪大学教授	石割隆喜
副査	大阪大学准教授	鈴木暁世

【論文内容の要旨】

本論文は、「東洋の周縁」に位置するポーランドと日本が、植民地主義の言説を通じて自己理解と国民的物語を形成してきた点で共通していると指摘して、その小説を比較している。

第1章は、本論文全体を要約する序論となっている。ジョゼフ・コンラッドの「homo duplex」（二重の人間）が本研究の指針に位置づけられ、ホミ・バーバの「コロニアル・アンビバレンス」論、酒井直樹の「対一形象化の図式」、マリア・ヤニオンの「不気味なスラヴ世界」論が理論的枠組みとして提示される。それをふまえて、日本とポーランドの「植民地化された植民者」という共通点が指摘される。

第2章は、19世紀における国民的アイデンティティの「演技性」を論じる。コンラッドの短編「カレイン」（1898）とシェンキェヴィチの短編「サシェム」（1883）が比較され、植民地支配を受けた者が同時に他者を「原住民化」する両義的構造が指摘される。

第3章は、大佛とコンラッドを比較している。大佛の「海の男」（1927）と『赤穂浪士』（1928）を題材として、日本の植民地言説における「亀裂」が、武士道とノスタルジアの関連で指摘される。そのニヒリズムは、コンラッドの『ロード・ジム』（1900）とさらに比較されている。

第4章は、コンラッドの『オルメイヤーの阿房宮』（1895）と大佛の『日本人オイン』（1930）における「ハイブリディティ」表象の差異を指摘している。コンラッドがハイブリディティの不安定性と植民地秩序の脆弱性を暴露したのに対し、大佛は「純心」という概念を通じて文化的統合の可能性を肯定的に描いたと整理される。

第5章は、シェンキェヴィチの『パン・ヴォウォディオフスキ』（1888）の「敗北の美学」と、大佛の『乞食大将』（1946）における後藤又兵衛の転落と誇りを分析している。その作業を通じて「要塞としての小国」という概念が提示され、それが両国の被害者ナショナリズムと深く結びついていることが確認される。

第 6 章は、ユーラシアの草原における「野蛮な同胞」との遭遇が論じられる。シェンキェヴィチの『炎と剣』(1884)におけるウクライナ・コサックと、大佛の満洲小説『幽霊大陸へ行く』(1939)における「満洲人」や中国人の表象が比較され、いずれにおいても「同胞」とされる他者が野蛮さと親縁性を併せ持つ両義的存在として描かれていることが指摘される。

【論文審査の結果の要旨】

本論文の総計は、約 30 万字に及び、日本語、英語、ポーランド語の関連文献を縦横に参照しているほか、第 1 章の一部そして第 4 章が、それぞれ査読付き学会誌に掲載された論文を元になっている。ポーランド文学の専門家として副査一名を含む 5 名の審査委員一同からは、ポーランドと日本について、ロシア・植民地主義・ナショナリズムを軸とする比較枠組みに、両者を大胆に位置づけた構想力と理論的射程が特に高く評価された。コンラッドの提示した“homo duplex”を上位概念に据え、シェンキェヴィチと大佛次郎を結びつけることで、被害者ナショナリズムの陰に隠されがちな両国の「加害／植民」性を可視化した点は、日本におけるポストコロニアル研究にも新たな視点を提供するものといえる。

同時に、この理論枠組みがきわめて強力であるゆえに、理論が先行し、個々の作品分析がその例証と適用の域を出ることがない点については不満の声が寄せられた。とりわけ、第 1 章において理論と問題設定がほぼ提示し尽くされている印象を与えるあまり、第 2 章以降が第 1 章以上のインパクトを持ちえないような印象を与えることは極めて惜しまれよう。ポーランドと日本の非対称性が一因とはいえ、ポーランドにおける日本受容がさして議論と関係しないからといって、日本におけるポーランド像の変遷やコンラッドなどの受容について、先行研究含め、ほとんど参照されないまま比較されるのは改善されるべきであろう。それでこそ作品固有の抵抗や、当初の理論そのものを揺るがす可能性をもつ「亀裂」がもっと見いだされたかもしれない。

とはいえこれは、日本とポーランドの文学についてその「植民地化された植民者」という研究の盲点を指摘し、両者を比較する新たな視座と土台を築き上げた力業と、裏腹ないしはトレードオフの関係にあり、あくまで瑕疵にとどまっている。今後は、この成果を元にして、上記の課題が解決されることに、審査委員一同から大きな期待が寄せられた。たとえば、より個別の精緻な作品分析や関連するメディアの事例研究を行うことで、本論文の理論枠組みは大いに改善されると考えられる。一部がすでに英語圏の学術雑誌に掲載されたように、今後、その成果を日本語だけでなくポーランド語含め外国語で公刊するよう、審査委員から慫慂されたことも付記しておきたい。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。